

瓦礫の山から神を掘る — 唐代景教文獻と研究のイデオロギー

マックス・デーク

(ウィーン大學、オーストリア)

人文學および文化研究は近年大きく變化している。研究者たちは（實證主義者の）客觀主義等の概念がいかに脆くはかないものかを益々強く意識するようになる一方で、自らが個人的背景や自らの屬する學問的傳統およびその歴史にいかに制約されているかを益々強く自覺するようになっている。このような状況は研究の方法論のみならず、研究分野やテーマにも影響を及ぼす。その結論として我々は、自身の研究者としての立場を認識し、そしてこの状況から發生する缺點を必要に應じて是正するために、我々の研究が過去に被り、そして現在も被り續けている諸前提條件を調べなくてはならない。

本稿では、いわゆる唐代の景教文獻について、それらのイデオロギー的・文化的な前提のいくつかを派生する諸問題とともに追跡したい。唐代景教文獻は、幾つかの點で上述の作業をするための理想的な資料根據となりうる。そこには二つの文化的流れと學問領域が關與する。二つとは、最も廣い意味での神學者と、最もニュートラルな意味でのオリエンタリストとである。絶えず景教文獻を使用している、いわゆる布教學を研究する人たちと、たとえば景教文獻の眞偽問題および、ある程度その中身までも議論してきた中國學の専門家との間には、かなり大きな溝がある。兩者の接點となるのは、日本人研究者でありキリスト教牧師であった（ピーター）佐伯好郎が行った景教文獻の英譯である。

本稿では、西安の大秦景教流行中國碑といわゆる敦煌景教寫本から幾つかの例をとりながら、いかなる形で、何故に、またどのような結果を招くものとして、同じ一つの文獻の「使用者」である二つのグループの間にコミュニケーションが成立していないかを示したい。特に注目するのは、神學者たち（ゲルハルト・ローゼンクランツ、ピーター・チュウ、サムエル・モッフエット、マーティン・パーマー）らを主とする専門外の者たちばかりでなく、宗教學の専門家や中國學者（ハンス=ヨアヒム・クリムカイト、タン・リー [唐麗]）らであるが、これらの人々は、佐伯好郎の英譯の確固たる傳統のもとに、道教、佛教ないし儒教の衣をかぶったキリスト教の概念の中國的解釋にすぎない諸文獻のうち、キリスト教の理念と術語とを讀み込もうとした。その意味で、彼らは「瓦礫の山から神を掘」ろうとした人々である。さらに私は、上述のような方法で文獻を讀むことに内在するイデオロギーの問題を論證したい。このことは、オリエンタリズムとは何かを議論する、より廣い文脈と關係する。我々のばあい重要な文脈は植民主義的に權力の問題を議論することではない。むしろ我々にとって特に議論すべき文脈は、キリスト教に代表されるが、場合により世界のいつどこにでも見出せるような遍在する宗教的「眞理」についてであり、そのような現象は、自分たちのほうが宗教的に優れていることを西洋が過去のアジアの文化の中に見て取ることであるから、それを私は新たに「超越的オリエンタリズム」と名付ける。

Max DEEG マックス・デーク

1958 年生

ウィーン大學組織神學研究所教授 Dr. Phil. habil. (ヴェルツブルク大學)

主要著作 *Die altindische Etymologie nach dem Verständnis Yāska's und seiner Vorgänger*
“Laozi oder Buddha?” “Von Integration zur Legitimation—Die Aśoka-Legende (Aśokāvadāna) im buddhistischen Indien und in China” “Der religiöse ‘Synkretismus’ der chinesischen Kaiserin Wu Zetian—Versuch einer Staatsreligion” “Das Ende des Dharma und die Ankunft des Maitreya” ほか多数